

[平成17年度普及に移す技術]

〔普及に移す技術名〕イチゴ用栽培システムを用いたアールスメロンの高設少量培地栽培
〔要約〕イチゴ用の高設栽培システムを用いて、窒素成分で100mg/l程度の灌水同時施肥および主枝1本仕立ての折り返し誘引を行うことで、アールスメロンの高設少量培地栽培が可能である。また、慣行の土耕栽培に比べ窒素施用量を3割程度削減できる。

〔キーワード〕アールスメロン、高設栽培、灌水同時施肥、少量培地

〔担当〕福井園試・野菜花き研究グループ

〔連絡先〕電話 0770-32-0009、電子メール enshi@pref.fukui.lg.jp

〔分類〕普及

〔背景・ねらい〕

嶺南地域の園芸は水田地帯で行われていることが多く、施設栽培を行っても地下水位が高いため、土耕では果菜類の栽培に不適である。そこで土壌条件の悪いところでも栽培が可能となり、かつ取り扱いの容易な少量培地栽培技術を確立する。ここでは、市販のイチゴ用の高設栽培システムをそのまま用いてアールスメロンの高設栽培を検討する。

〔技術の内容・特徴〕

1. ベッドおよび給液装置はイチゴの栽培システムをそのまま用い、株間約35cm(1株当たり培土量8~10L)で定植する。ベッドの約80cm上に誘引用と玉吊り用の番線を張り、主枝1本仕立ての折り返し誘引とする(図1)。
2. 水溶性化学肥料(OK-F-1)を使用する場合、給液濃度は窒素で100mg/l程度とし、生育や天候に応じて灌水施肥する(図2)。
3. 地床栽培(慣行栽培)に比べ、窒素施用量を3割程度削減しても同等の収量が得られる(表1)。
4. 外観や糖度等の品質は地床栽培とほぼ同等になり、果形は地床栽培より正球形に近く、また果梗は短く良形となる(表1、2)。

〔技術の活用面・留意点〕

1. 排水不良や土壌病害で作付が困難な圃場で利用できる。また、抑制作(6月上旬定植)は、イチゴの栽培終了後のベッドにそのまま定植でき、イチゴの定植までに栽培が完了するため、イチゴ-メロン輪作体系が組める。
2. 芽かき、摘心等の管理は慣行に準じて行う。着果節位は下位葉の葉面積に応じて上下させるが、玉吊りの際位置を揃えるように調整する。
3. 1回当たりの灌水量は200ml/株程度を目安にするが、灌水量および灌水回数は培土によって加減し、株がしおれないようにする。また、曇雨天時には晴天時の灌水量の0~1/2にする。なお、着果30~35日後からは灌水のみとする。水みちや、撥水が生じた場合は透水剤を処理する。
4. 試験に利用したイチゴ栽培システムの主な構成は、矢崎化工製ベッド、ドサトロン、ラム17で、田土とピートモスを等量混合したものにパーライトを1割混合した培土を使用した。

[具体的データ]

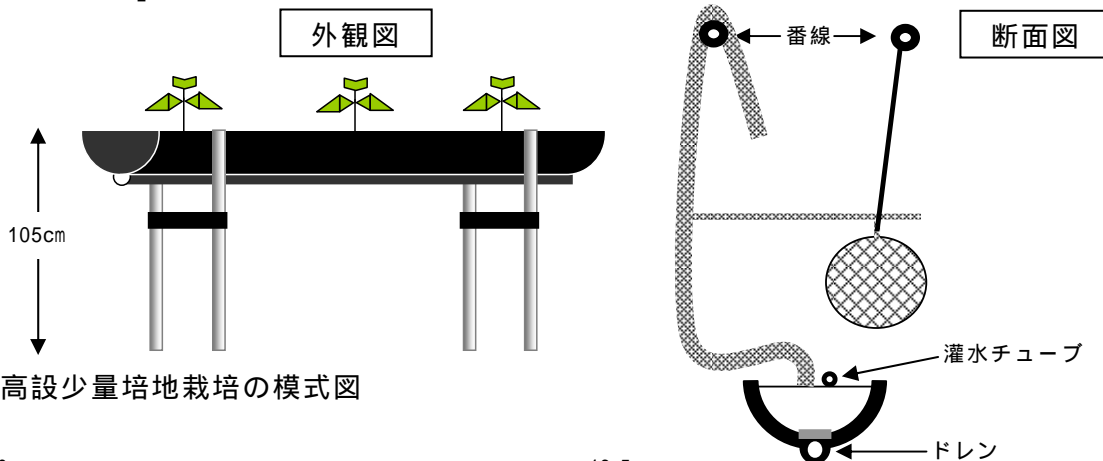


図1 高設少量培地栽培の模式図

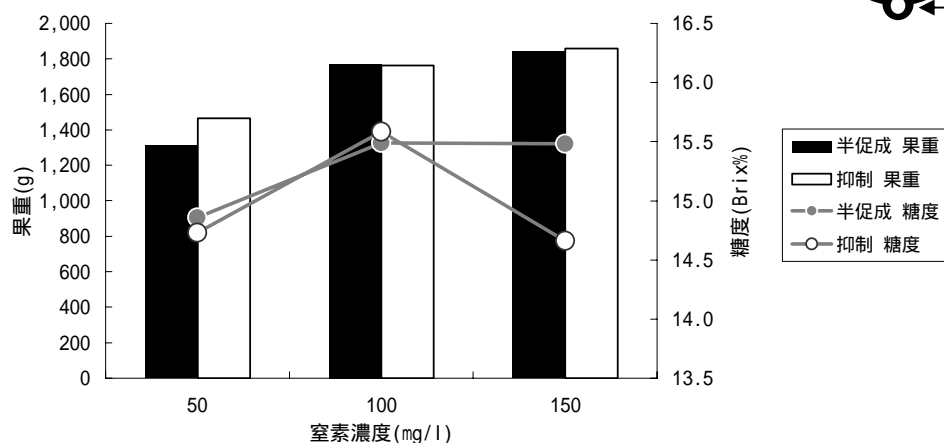


図2 高設少量培地栽培における給液中の窒素濃度が果重及び糖度に及ぼす影響

表1 栽培方式の違いが果実に及ぼす影響

	品種	N施用量 (g/株)	果重 (g)	縦径 (cm)	横径 (cm)	果梗長 (cm)	ネット			果皮色	糖度 (%)	
							太さ	密度	盛り			
抑制	高設少量	アールス妃	4.9	1,820	15.9	14.9	1.4	3.1	2.8	2.9	3.0	16.2
				ベネチア夏2	1,786	16.4	14.9	1.3	3.0	2.4	2.8	4.0
	地床(慣行)	アールス妃	7.1	1,803	16.7	15.0	1.8	3.0	3.3	2.8	3.0	15.4
				ベネチア夏2	1,950	17.8	14.9	2.1	2.6	2.5	2.8	3.2
半促成	高設少量	ベネチア夏1	4.4	1,770	15.4	14.8	1.2	2.7	3.4	3.1	2.8	15.5
				地床(慣行)	ベネチア夏1	6.8	1,831	16.4	14.6	1.6	2.9	2.9

指数は1~5で、数字が大きいほど太、高、強、濃、小さいほど細、低、弱、淡を示す

注) 高設少量の給液中の窒素濃度は100mg/l

参考) 高設少量の「ベネチア夏2」の2002~2004年抑制の平均収量は352kg/a

表2 栽培方式の違いが果形に及ぼす影響

	縦横比	果梗長(cm)
高設少量培地	1.03	1.3
地床(慣行)	1.14	1.8
	**	**

注) **1%水準で有意